

# 英語動詞の叙法と法性 (2)

—法助動詞等の法性—

前 川 哲 郎

F. R. Palmer の *Modality and the English Modals* (1979) と *Mood and Modality* (1986) の体系に準拠して、他の英語学者の諸説も参照しつつ、私見も加えて修正し、認識・義務・起動の法性に分け、起動の法性は更に「主語本位の法性」と「環境による法性」とに分けた上で、各法性に「可能性」「不可能性」「必然性/必要性」の3下位区分を設けた《法助動詞の法性体系》を立て、その各区分に現代英語の用例を挙げた。

キーワード：法助動詞，法性，認識の法性，義務の法性，起動の法性

## 第2章 英語の法性

### 1. Modality (法性)

「法性 (modality)」とは、叙法 (Mood), 法助動詞 (Modal Auxiliary), 法副詞 (Modal Adverb), 法形容詞 (Modal Adjective) 等によって表される、文の叙述内容に対する話者の心的態度を表す表現・意味をいう。

F. R. Palmer は、その著 *The English Verb* (London : Longman, 1974) で法助動詞 (modals) を扱うに際して「認識の (epistemic) 用法対非認識の (non-epistemic) 用法」の対立を導入しているけれども、意味論的 (semantic) 概念としてのモダリティ〔即ち法性〕の概念を英語学に導入した一人は、*Semantics* (Cambridge : Cambridge University Press, 1977 : Vol. 2, 787-849) の著者 John Lyons であろう。続いて、F. R. Palmer は *Modality and the English Modals* (London : Longman, 1979 : 2) と *Mood and Modality* (Cambridge : Cambridge University Press, 1986 : 10-11) に於いて、モダリティに就いての先駆的な研究である von Wright の *An Essay in Modal Logic* (Amsterdam : North Holland, 1951 : 1-2) の4種の法 the alethic modes, the epistemic modes, the deontic modes, the existential modes を挙げて、その中で特に重要なのは、epistemic modality (認識の法性) と deontic modality (義務の法性) であるとしている。更に、

von Wright (1951 : 28) の脚注に言及して (Palmer, 1979 : 3 ; 1986 : 12), 英文法の法助動詞 (modal auxiliaries [modals]) の法性体系に ‘the subject’s ability’ (Palmer, 1986 : 16) を表す *can* 等を扱う法性として dynamic modality (起動の法性) という範疇を設ける必要を示唆し, 前著 *Modality and the English Modals* (F. Palmer, 1979 : 3) では, この範疇を扱う章(91-160) を設けて ‘ability and disposition’ を表す法助動詞を論じている。

以上の諸説を参考にして考察すると, 現代英語の法助動詞の法性は, (1) **Epistemic Modality** (認識の法性), (2) **Deontic Modality** (義務の法性), (3) **Dynamic Modality** (起動の法性) の3種に大別して考えるのが妥当であろう。

ところで, 法性の概念は, 夙にギリシャのアリストテレスによって, ほぼ現在の意味で使われている。Michael R. Perkins はその著 *Modal Expressions in English* (Norwood : Ablex, 1983) で, アリストテレスの法性の論理の基本を ‘the notions of necessity, possibility, and impossibility’ (Perkins, 1983 : 6) だと紹介している。

この the notions of necessity, possibility, and impossibility という基本的な考え方を, 上の法性の3大別 (即ち Epistemic, Deontic and Dynamic Modalities) に適用して, 3種の法性の下位区分とすると, 現代英語の法助動詞の法性が概略次の様に整理出来るのである。

## 2. Classification of Modality (法性の分類)

### 2.1. Epistemic Modality (認識の法性)

F. R. Palmer は, ‘epistemic’ という用語を ‘modal systems that basically involve the notions of possibility and necessity’ にだけ適用するのではなく, ‘any modal system that indicates the degree of commitment by the speaker to what he says’ (F. Palmer, 1986 : 51) に適用すべきであると説いている。更に, 認識の法性を表す基本的な助動詞 *may* と *must* に就いて, *may* が possibility (可能性) を表し, *must* が necessity (必然性) を表すことを指摘した上で, 認識の法助動詞の職能は ‘to make judgments about the possibility, etc. that something is or is not the case’ である, 従って認識の法性は ‘the modality of propositions rather than of actions, states, events, etc.’ (F. Palmer, 1979 : 41) である, と言っている。又, 認識の法性を表す助動詞 *may* は ‘It is possible that...’ とパラフレイズ出来るが, *must* の意味は正確にパラフレイズすることは出来なくて, ‘The only possible conclusion is that...’ 位が一番近いことを指摘している。これに impossibility (不可能性) を表す否定形の *cannot* を追加すると, 次の様に整理できる。

認識の法性を表す基本的な助動詞は *may* とその否定形 *may not* と, *must* と, 否定形の *cannot* とであり, *must* が「必然性」を表し, *may* とその否定形 *may not* とが「可能性」を表し, 否定形の *cannot* が「不可能性」を表す。認識の法助動詞の職能は, 陳述内容の必然性や可能性や不可能性に就いての「話者の判断 (judgments)」を表すことであり, 話者の掛かり合い

(commitment) がある。

## 2.2. Deontic Modality (義務の法性)

F. R. Palmer は、‘deontic’の意味に就いては、‘to include those types of modality that are characterized by Jespersen as “containing an element of will” と断って、認識の法性の表す意味が ‘belief, knowledge, truth, etc. in relation to proposition’ に関わるものであるのに対して、義務の法性の表す意味は ‘action, by others and by the speaker himself’ (F. Palmer, 1986 : 96) に関わるものである、と述べている。更に、義務の法性に共通の特徴として、‘subjectivity, i. e. the involvement of the speaker’ と ‘non-factuality’ とがあることを指摘した上で、広い意味での義務の法性の表現には、実動詞 *hope* や *wish* を使って ‘I hope John will come.’ や ‘I wish John would come.’ の様に、「期待」や「(現実に反しての) 願望」を表すものもあることを指摘している (F. Palmer, 1986 : 97)。

義務の法性は、「義務 (obligation) ・命令 (command)」や「許可 (permission)」や、否定形で「禁止 (prohibition)」を表す。義務・許可を課す〔与える〕者のことを「義務源 (Deontic Source)」(J. Lyons, 1977 : 843) と言う。

義務の法性を表す基本的な助動詞は *must* とその否定形 *must not* と、*may* とその否定形 *may not* と、*can* と否定形の *cannot* と *need not* である。現在または未来の「必要性 (necessity)」を表す *must* は、実質的には大抵「命令」を表し、否定形の *must not* は「禁止」を表す。「可能性 (possibility)」を表す *may* は「許可」を表し、*can* は「命令」を表す。また「不可能性 (impossibility)」を表す *cannot* は「禁止」を表すが、*need not* は「不必要」を表す。

## 2.3. Dynamic Modality (起動の法性)

F. R. Palmer は、*can* のモダリティに就いて、‘John can speak Italian’ の *can* の様に、*can* には話者の心的態度も話者の意見も含まれないで、‘what seems to be a factual non-modal statement’ を表すのに用いられることが多いにも拘らず、*can* は紛うことなく法助動詞である、と言っている (F. Palmer, 1986 : 102)。

従って、*Modality and the English Modals* (F. Palmer, 1979) では、英語の modality を、epistemic, deontic and dynamic の3種に分類したのであった。同じ F. R. Palmer が *Mood and Modality* では、起動の法性を ‘modality which is concerned with ability and disposition’ (F. Palmer, 1986 : 12) と定義して、「法性的 (modal)」か「非法的 (non-modal)」かという点は、曖昧なままにしている。

確かに、「主語の能力 (ability)」を表す *can* は「話者の心的態度 (the speaker’s attitude)」とも「話者の意見 (the speaker’s opinion)」とも無関係であるので、話者の掛かり合い (commitment) が殆どない点で、「非法的 (non-modal)」とも言える。しかし、「主語の能力」を表す *can*

は「主語の能力に就いての話者の表現である」という意味で、内容的にも「法助動詞」であり、起動の法性 (Dynamic Modality) の範疇に入る。

起動の法性の法助動詞は、上記の「主語の能力」を表す「主語本位の法性 (Subject-Oriented Modality)」の他に、「環境による法性 (Circumstantial Modality)」がある。両者共、「可能性」を表す場合と「不可能性」を表す場合があるが、「必然性」を表す場合は「環境による法性」のみである。

#### 2.4. Modality of Modals in Subordinate Clauses (従位文句〔従文〕に於ける法助動詞の法性)

従位文句〔従文〕(Subordinate Clause) の動詞のモダリティに就いては、F. R. Palmer は、*'Modals can, of course, occur like any other forms in English in subordinate clauses.'* と説いて、義務の法助動詞 *must* の他、*should, may, can, shall* 等を例示している (F. Palmer, 1979 : 160-161)。ここで F. R. Palmer が、義務の法助動詞 *must* が従位文句〔従文〕に用いられた例として引用している例文、

A new insistence from President Nixon that the Hanoi government must negotiate if there's to be any settlement. (W.2.3b.13)

の *must* は、第1章 (本誌『文学部論集』第79号, pp. 111-24) に従属命令・願望の述語動詞として引用した例文 (51-1)

(51-1) And he then insisted that she *should* tramp around barefoot until the pale flesh had become sunburned and the nail had cracked and split. (F. King)

の *should* と同様、従属命令・願望の述部に用いられた「叙想法代用 (Subjunctive Equivalent)」の同類である。従って、この種の *should* は、義務の法性の要素を持った「叙想法代用」の法助動詞であると見なすべきである。

F. R. Palmer がここで言及した他の法助動詞 *should, may, can, shall* 等も、総て従位文句の述部に用いられた「叙想法代用」の法助動詞である。(本誌『文学部論集』第79号, pp. 119-23参照)

#### 2.5. Modal Adverbs and Modal Adjectives (法副詞と法形容詞)

John Lyons は、*Semantics* (Lyons, 1977 : 796) で、*'He may have gone to Paris.'* 等の法助動詞の用法と比較して、*'Perhaps he went to Paris.'* の *perhaps* 等の副詞や副詞類を「法副詞 (Modal Adverb)」と呼び、*'It's possible that he went to Paris.'* の *possible* 等の形容詞を「法形容詞 (Modal Adjective)」と呼んでいる。

これは「法助動詞のパラフレイズ」ということで説明出来る。*Oxford Advanced Learner's Dictionary* では、認識の法性を表す助動詞 *may* の用例 *'He may have missed his train.'* を、法副詞で文修飾副詞 (Sentence Modifying Adverb) の *perhaps* を用いて *'Perhaps he has missed his*

train.’ (OALD) とパラフレイズしている。また、同辞典で、同じ助動詞 *may* の用例 ‘You *may* walk for miles and miles among the hills without meeting anyone.’ は、「可能性」を表す法形容詞を用いて ‘It is *possible* to walk for miles and miles among the hills without meeting anyone.’ (OALD) とパラフレイズされている。この様な副詞 *possibly, perhaps, probably, surely, certainly, necessarily* 等や「It is + 形容詞 *possible, probable, certain, sure, impossible, necessary* 等」は、叙述内容に対する「話者の心的態度」を示す副詞や形容詞であるので、前者は「法副詞 (Modal Adverb)」, 後者は「法形容詞 (Modal Adjective)」と呼ばれるのである。

更に、法副詞や法形容詞構文に相当する、「法性上位文句 (Modal Superordinate Clause)」とも呼ぶべき「It... that」構文 (例えば *It seems that no one knew what had happened.* (OALD)) に、法助動詞が用いられることがある。

### 3. Examples of Epistemic Modality (認識の法性の用例)

#### 3.1. Epistemic Possibility

##### 3.1.1. MAY

認識の法性を表す助動詞 *may* は ‘It is possible that...’ とパラフレイズ出来る。COD (= *Concise Oxford Dictionary*) は、次の様な例文で説いて反意語の例文も挙げている。 *It may be true.* (opp. *It cannot be true.*) *It may not be true.* (opp. *It must be true.*) 次の用例は法副詞にパラフレイズして説明している。 *He may or might (=will perhaps) lose his way.* 又、「起動の可能性」を表す用例には、 *You may walk ten miles without seeing one.* がある。

(1) Air fares in Europe *may* be increased—possibly by amounts between 2 and 5 percent—from April 1 as a result of a special private meeting of European airlines which opens in Paris this morning. (LOB A15)

(2) “The map *may* be all right enough,” said one of the party. (J. K. Jerome)

##### 3.1.2. CAN

(3) One of the prisoners escaped yesterday; he *can* [=may] be anywhere by now. (OALD=*Oxford Advanced Learner’s Dictionary*)

Epistemic *can* と *may* の違いに就いて F. R. Palmer は、G. N. Leech の *Towards a Semantic Description of English* (London : Longman, 1969 : 220) では、

The monsoon *can* be dangerous.

The monsoon *may* be dangerous.

を例示しているが、後者は an epistemic interpretation であろうが、否定の場合は違いが更に明確になる、として

Lions *cannot* be dangerous.

Lions *may not* be dangerous.

を例示し、前者は *No lions are dangerous.* の義であるが、後者は *Some lions are not dangerous.* の義であると説いている (F. Palmer, 1979 : 154)。

法性の先駆的研究者の一人 Jennifer Coates は、Bas Aarts and Charles F. Meyer (eds.)(1995) *The Verb in Contemporary English* (Cambridge University Press : 152-4) に寄稿した論文 “Root and Epistemic Possibility in English” の中で、*We hope this coding system can be useful.* という例文を挙げ、米国人にとってはこの表現はごく自然であって、何の問題もないが、英国人は決してこうは言わないで、さしずめ *We hope this coding system will be useful.* と言うだろう。こういう言語環境の要因として、イギリス英語では *may* が Epistemic Possibility の典型である、ということを描している。

### 3.2. Epistemic Necessity

#### 3.2.1. MUST

認識の法性を表す法助動詞意味に就いて、Gwyneth Fox が *Managing Editor* の *Collins COBUILD English Grammar* (London : Collins, 1990 : 223) は、*You use must to indicate that you believe something is the case, because of particular facts or circumstances.* と説いている。下の例文 (5) では (聞き手が帰りの車中で *yapping poodles* に悩まされたことに言及し言う) *after all those poodles* が *particular facts or circumstances* である。

COD はこの義の *must* の例文として、*You must lose whichever happens.* を挙げ、*=You are certain to lose whichever happens.* とパラフレイズして、(opp. *You cannot lose whichever happens.*) と説いている。又、下の例文 (7), (8) は、法副詞を使ってパラフレイズした例になる。

- (4) *Do ye know that there is a very rich Mrs d'Urberville living on the outskirts o' The Chase, who must be our relation?* (T. Hardy)
- (5) *I mean, you must be exhausted after all those poodles.* (P. Shaffer)
- (6) “*He must be crazy.*” “*No, he isn't.*” (W. S. Maugham)
- (7) *You must be aware of this.* [=You surely are aware of this.] (COD)
- (8) *He must be mad.* [=He clearly is mad.] (COD)

#### 3.2.2. WILL

COD<sup>5</sup> では、この種の *will* の用例として *This will be Waterloo, I suppose.* を挙げ、法形容詞を使って *=This is likely to turn out to be Waterloo.* とパラフレイズしている。

- (9) *If I fall under the shock of the leap of the moment you will be on me, tearing me to pieces.* (V. Woolf)

#### 3.2.3. OUGHT

- (10) *It ought to be quite easy.* (COBUD=*Collins COBUILD English Dictionary*)

### 3.3. Forms in relation to Past Time (過去時に言及する形)

過去時に言及する法性は「法助動詞+have+en 分詞」の形で表される。

*Collins COBUILD English Grammar* では、You use *may* with *have* to say that it is possible that something was the case, but you do not know whether it was the case or not. (Fox, 1990 : 226) と説いている。COD では、次の様な例文を挙げて、法副詞を使ったパラフレイズで説明している。*I may have been wrong.* [=I perhaps was wrong.]/*You must have known quite well what I meant.* [=You surely knew quite well what I meant.] 又、OALD では、例文 (12) に (*Can have* is used for past time.) と注記している。

- (11) A gigantic meteorite *may have* wiped out the dinosaurs 65 million years ago. (COBUD)
- (12) He's an hour late: he *can have* been delayed by fog, of course. (OALD)
- (13) It *must have* cost a pretty penny, what? (P. Shaffer)
- (14) It *must have* been difficult for the people of England in those days to have found a spot where these thoughtless young folk were not spooning. (J. K. Jerome)
- (15) I tried to feel my heart. I could not feel my heart. It had stopped beating. I have since been induced to come to the opinion that it *must have* been there all the time, and *must have* been beating, but I cannot account for it. (J. K. Jerome)

### 3.4. Tentative Forms (仮説形)

法助動詞の過去形は、従位文句に用いられて時制の連続 (Sequence of Tenses) により過去時を基準とした時を表す場合を除くと、過去時を表すことは稀であり、大抵は「仮説性 (tentativeness)」や「反実性 (unreality)」を表す。これらを一括して「仮説形 (Tentative Form)」と呼ぶ。COD が挙げて、パラフレイズもしている *He might lose his way.* [=He will perhaps lose his way.] 等の *might* がその好例である。

*Collins COBUILD English Grammar* では、You use *could*, *might*, or *may* to say that there is a possibility of something happening or being the case. *May* is slightly more formal than *could* or *might*. (Fox, 1990 : 224) と説いている。これは次の例文 (16) (17) (18) の説明になる。又、You use *would*, when you are not certain that what you are saying is correct. (COBUD) と説いているのは、例文 (19) の説明になる。

#### 3.4.1. MIGHT

- (16) "The Herald Tribune *might* be more appropriate," he said in his Tennessee drawl so strangely devoid of warmth. (W. Styron)
- (17) It *might* touch his heart. (P. Shaffer)

#### 3.4.2. COULD

- (18) One of the prisoners escaped yesterday; he *could* [=may] be anywhere by now. (OALD)

### 3.4.3. WOULD

(19) I *would* think that possibly in our climate we might have a few problems. (COBUD)

### 3.4.4. SHOULD

(20) Why *should* either of us feel guilty? (N. Coward)

(21) Carol: Where are the matches?

Brindsley: They *should* be on the drinks table. (P. Shaffer)

(22) Otherwise I *should* think the work would be unbearable. (N. Coward)

## 3.5. Tentative Forms in relation to Past Time (過去時に言及する仮説形)

COD が挙げて、法副詞でパラフレイズしている *I might have been wrong*. [=I was perhaps wrong.] 等が好例である。

(23) It *might have* been mere sounds, and it *would have* acted upon him in the same way. (D. H. Lawrence)

(24) It *could have* been the cup out of which Jesus drank at the Last Supper. (L. Durrell)

## 3.6. Negative Forms (否定形)

### 3.6.1. MAY NOT

これは possibility (可能性) の部分否定であって、反意語は COD が次の例文で説く様に、*must* である。It *may not be true*. (opp. It *must be true*.) (COD)

(25) I *may not* be at Trantridge—I am going to London for a time—I can't stand the old woman. (T. Hardy)

### 3.6.2. CANNOT

これは *Longman Dictionary of Contemporary English* (LDCE と略称) が法形容詞でパラフレイズして説いている様に impossibility (不可能性) を表す。This *can't be true*. [=It is not possible that it is true.] (LDCE)

(26) 'Perhaps, although you smile, it is as serious as yours, or more so.' 'It *can hardly* be more serious, dearest.' 'It *cannot*—O no, it cannot!' She jumped up joyfully at the hope. 'No, it *cannot* be more serious, certainly.' she cried, 'because 'tis just the same! I will tell you now.' (T. Hardy)

## 3.7. Negative Forms in relation to Past Time (過去時に言及する否定形)

例文 (27) の場合の様に「法助動詞+have+-en 分詞」となる形と、例文 (28) の場合の様に「過去形法助動詞+原形不定詞」となる形がある。

(27) He *can't have* said that. (COBUD)



(28) He *couldn't* bear to see it fail. (W. S. Maugham)

#### 4. Deontic Modality の用例

##### 4.1. Deontic Possibility

###### 4.1.1. Permission (許可)

*Longman Dictionary of Contemporary English* (s. v. *can*: Usage 1) では、義務の法性の「許可」を表す *may* と *can* の使い分けに就いて次の様に言っている。

*Can* is now more common than *may* or *might* to express informally the idea of “permission”, since we do not feel it polite to say to another person:

You *may* (*not*) do this.

But we often use *may* when talking about ourselves:

*May* [*Might*] I help you? (LDCE, s. v. *can*)

COD は、*may* の反意語として、次の様な語句を挙げている。You *may* go. (opp. You may not or must not or cannot go.)(COD) 又、「許可」を表す *can* の用例を次の様にパラフレイズしている。All right, you *can* go. [=All right, you are permitted to go.] (COD)

(29) When I come back I'll give you full directions, and if you insist upon walking you *may*; or you *may* ride—at your pleasure. (T. Hardy)

(30) ‘You *can* try your hand upon she,’ he pursued, nodding to the nearest cow. (T. Hardy)

###### 4.1.2. Command (命令)

LDCE は、この義の *can* の用例 *If you don't be quiet you can leave the room.* を *can*=have to=*must* とパラフレイズしている。[=*If you don't be quiet you have to leave the room.*] (LDCE)

(31) Carol: You—you *can* leave my umbrella there.

Colonel: Very well, Dumpling. Anythin' to oblige. (P. Shaffer)

(32) I don't care what you call it. I like it, and if you don't like it you *can* lump it. (W. S. Maugham)

##### 4.2. Deontic Necessity

現在または未来の「必要性」(Necessity) は、実質的には「命令」(command) を意味する場合が多い。CODはこの義の *must* の用例と反意語として、*You must find it.* (opp. You need not find it.) を挙げ、次の例文とそのパラフレイズを挙げている。*We must see what can be done.* [=We are obliged to see what can be done.] (COD)

(33) Oh my dear, you *must* get some help. (P. Shaffer)

(34) You *must* know who you are, what you are, and not get unreal ideas. (S. Bellow)

- (35) "You *must* give her a chance, Mum." (W. S. Maugham)
- (36) The house *must* be cleaned if there are guests. (LDCE)
- (37) School *must* teach children the difference between right and wrong. (COBUD)
- (38) I suppose all doctors *ought to* have ideals, really. (N. Coward)

#### 4.3. Promise or Threat (約束または脅し〔脅迫])

F. R. Palmer は *Grammar* (Harmondsworth : Penguin Books, 1971 : 191) で, *shall* is used also for threat or promise と述べて, *You shall have it tomorrow.* を例示している。この場合, *it* が相手にとって不都合なことであれば「脅し〔脅迫〕」になり, 好都合なことであれば「約束」になる。David J. Carver *et al.* 編の *Collins English Learner's Dictionary* (CELD と略称) (London : Collins, 1972 : 460) では, *You shall not leave this room. / All pupils shall be present.* と, 二人称の例と三人称の例を挙げている。これらは「命令」を表している。

- (39) If you work well, you shall have higher wages. (OALD)

#### 4.4. Negative Forms (否定形)

「命令」の否定形は, prohibition (禁止) を表す。COD では, この義の *must not* を次の様な例文とパラフレイズで説いている。*You must not infer.* [=You must avoid the inference.] (COD) 但し, necessity (必要性) の否定である *need not* は「不必要」を表す。

- (40) But Hermione ignored him, he *must not* presume, before she had finished. (D. H. Lawrence)
- (41) You *mustn't* miss it [=the train]. (N. Coward)
- (42) You *shall not* catch me again. (COD)
- (43) No more drink *shall* be drunk tonight. (COBUD)
- (44) He said, "One *can't* turn one's back for a moment! (L. Durrell)
- (45) You *needn't* mind everything I say so particularly. (W. S. Maugham)

#### 4.5. Interrogative forms (疑問形)

##### 4.5.1. MAY and CAN

Michael R. Perkins は, 義務の法性の法助動詞 *can* を用いた疑問文で「許可」を求めるのは間違いであり, *may* を用いるべきであるとする考え方があったとして,

Johnny: *Can* I go out?

Mother: Not *can*, *may*.

Johnny: O.K., *may* I go out?

Mother: Sure you *can*.

を例示した上で, ‘However, the deontic use of CAN is now well established and prejudices seem to have weakened to the point where CAN is no longer regarded as incorrect, but merely as a less polite version of MAY.’ (Perkins, 1983 : 38) と説いている。また, *Collins COBUILD English Grammar* では, ‘May I help you?’ 等と義務の法性の法助動詞 *can* や *may* を用いた疑問文で「援助」等を申し出る表現では, *may* を用いた方が less common であり, rather formal and old-fashioned である (Fox, 1990 : 231) と説かれている。

例文 (48), (49) は Tentative Forms(仮説形) の疑問形の例。

(46) *May I come in?* (LDCE) Cf. *Can I help you?* (N. Coward)

(47) *Can I call you tomorrow?* (P. Shaffer) Cf. ‘Mum, *can I have a kite?*’ he cried. (W. S. Maugham)

(48) Please *could* you give me a glass of water? (N. Coward)

(49) *Couldn't* I write to you—just once in a while? (N. Coward)

#### 4.5.2. SHALL, OUGHT, NEED

特にイギリス英語では, 疑問文・否定文で, *must* の代わりに助動詞としての *need* が用いられる。例文 (54) 及び Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1994), *A Communicative Grammar of English* 2nd ed. (London: Longman) § 327 Note[b] 参照。

(50) “*Shall we go?*” “Yes, let’s.” (LDCE)

(51) “*Shall I get you a chair?*” “Yes, please.” (LDCE)

(52) “*Shall I see you again?*” “Of course.” (N. Coward)

(53) *Oughtn't* we to phone for the police? (COBUD)

(54) “*Need you go yet?*” “No, I needn’t.” (OALD)

#### 4.6. Forms in relation to Past Time (過去時に言及する形)

例文 (55) と (56) は, 過去に於ける「必要性」と「不必要性」を表す。過去時に言及する義務の法性は, 過去に於いて為すべきであった事をしなかった, または為すべきではなかった事をしてしまったことに対する「反省」または「非難」を表す。

(55) In order to qualify for Unemployed Benefit, you *must have* paid at least 26 Class 1 contributions. [=it is necessary for you to have paid...] (COBUD)

(56) We *needn't have* hurried. [=We hurried, but now we see that this was unnecessary.] (OALD)

(57) I *must have* put it [=the cuff-link] on the table when you were rolling the pastry. (W. Emms)

(58) I *ought to have* said yes. (COBUD)

(59) I *ought not to have* come here. (COBUD)

(60) I don't think we *should have* done it. (P. Shaffer)

(61) You *should* [=ought to] *have been* more careful. (OALD)

## 5. Dynamic Modality の用例

起動の法性 (Dynamic Modality) は, 'She *can* speak French. [=She is able to speak French.] (OALD)' や 'He'll come, if you ask him.' 等の様な「主語の能力 (ability) や性質 (disposition)」に就いての話者の表現である「主語本位の法性 (subject-oriented modality)」と, 'You *must* go now if you wish to catch the bus.' 等「環境による法性 (circumstantial modality)」とに分かれる。例えば 'You *may* smoke in here.' (Palmer, 1986 : 103) は義務の法性を表すが, 'You *can* smoke in here.' (*Ibid.*) は環境による起動の法性を表す。

*Mood and Modality* (F. Palmer, 1986) で F. R. Palmer は, epistemic modality (認識の法性) と deontic modality (義務の法性) を総括して次の様に言っている。

Semantically, epistemic and deontic modality might seem to have little in common. One is concerned with language as information, with the expression of the degree or nature of the speaker's commitment to the truth of what he says. The other is concerned with language as action, mostly with the expression by the speaker of his attitude towards possible actions by himself and others. Indeed, all that they seem to share is the involvement of the speaker. (F. Palmer, 1986 : 121)

この伝でいくと, dynamic modality (起動の法性) は, it is concerned with language as ability or disposition, with the expression by the speaker of the ability or willingness of the subject ということになるであろう。

### 5.1. Dynamic Possibility

#### 5.1.1. CAN

起動の法性の *can* は「環境による法性」の場合は「可能性」を表し, 「主語本位の法性」の場合は the subject's ability (主語の能力) を表す。次の (62) は「可能性」を表し, (63) は「主語の能力」を表す。

(62) You *can* just make it, if you hurry. (P. Shaffer)

(63) She *can* run better than what I can. (W. S. Maugham)

#### 5.1.2. CAN with a 'Private' Verb (私的動詞を伴う *can*)

*Modality and the English Modals* (F. Palmer, 1979 : 74) で F. R. Palmer は私的動詞を伴う *can see* と私的動詞 *see* だけの場合との違いに言及している。例えば, 'I *can see* the moon.' と 'I see the moon.' とは殆ど同義であるが, 次の文では,

He has marvellous eyes; he *can see* the tiniest detail.

From the top you *can see* the whole of the city.

*can see* と私的動詞 *see* とを交換することは出来ないとしている。上文の第1例の *can* は「主語の能力」を表し、第2例の *can* は「可能性」を表す。

(64) Jack and perch may be about there. Indeed, I know for a fact that they are. You *can see* them there in shoals, when you are out for a walk. (J. K. Jerome)

(65) I *can see* he's got excellent taste. (P. Shaffer)

### 5.1.3. Negative Forms (否定形)

例文 (66) の *cannot* は「環境による法性」の場合で「不可能性」を表し、(67) の *cannot* は「主語本位の法性」の場合で「主語の能力」の否定を表す。

(66) 'O Mr Clare—I *cannot* be your wife—I *cannot* be!' The sound of her own decision seemed to break Tess's very heart, and she bowed her face in her grief. (T. Hardy)

(67) I *cannot* remember my past. (V. Woolf)

### 5.1.4. Interrogative Forms (疑問形)

(68) At the end of the ceremony Mrs d'Urberville abruptly asked Tess, twitching her face into undulations, 'Can you whistle?' (T. Hardy)

(69) What happiness or misery *can* it offer instead of pipes and sheep or musical, milk-drinking innocence? (S. Bellow)

(70) *Can't* you put the light on, dammit? (P. Shaffer)

### 5.1.5. Forms in relation to Past Time (過去時に言及する形)

OALD は過去に於ける「主語の能力」を表す例として *She could read Latin and Greek when she was ten.* を挙げている。

(71) Anna *could* not go on with her fault-finding, her criticism, her expression of dissatisfactions. (D. H. Lawrence)

(72) So I *could* choose whatever kind of job I wanted, when I wanted. (N. Reid)

(73) I *could* not at first feel any pulse at all. Then, all of a sudden, it seemed to start off. (J. K. Jerome)

### 5.1.6. Tentative Forms (仮説形)

OALD では、次の様な例文と注記でこの種の *could* を説いている。 *Could you lift that box [i. e. now, if you tried]?* (OALD)

(74) I have about a hundred and eighty bucks in the bank. I can take it out when it opens in the morning, and then I *could* go down and get this guy's car. (J. D. Salinger)

### 5.1.7. MAY

COD はこの種の *may* の例として、 *You may walk ten miles without seeing one.* (COD) を挙げていることは 3.1.1. で触れた。

- (75) In the valley beneath lay the city they had just left, its more prominent buildings showing as in an isometric drawing—among them the broad cathedral tower, with its Norman windows and immense length of aisle and nave, the spires of St Thomas's, the pinnacled tower of the College, and, more to the right, the tower and gables of the ancient hospice, where to this day the pilgrim *may* receive his dole of bread and ale. (T. Hardy)
- (76) If the verdict is unacceptable, the defendant *may* appeal. (COBUD)

## 5.2. Dynamic Necessity

CELD は「起動の必然性」を表す *must* を説明する例文として *Of course, he must come and interrupt me just when I had started to study.* を挙げ、used to show annoyance when telling about something that has happened と説いている。

### 5.2.1. MUST

- (77) Just as I was getting better, what *must* I do but break my leg? (COD)
- (78) I *must* cry to you in my trouble—I have no one else... I think I *must* die if you do not come soon, or tell me to come to you... Please, please not to be just; only a little kind to me! (T. Hardy)
- (79) 'Why should we put an end to all that's sweet and lovely!' she deprecated. 'What *must* come will come.' And, looking through the shutter-chink: 'All is trouble outside there; inside here content.' (T. Hardy)

### 5.2.2. MAY/MIGHT AS WELL

この慣用句の用例として、辞典は次の様な例文を挙げている。*There's nothing to do, so I may as well go to bed.* (LDCE)/ *It's very cold so we might as well take the car.* (CELD) 下に引用例を挙げる。

- (80) 'I *may as well* say it now as later, dearest,' he resumed gently. 'I wish to ask you something of a very practical nature, which I have been thinking of ever since that day last week in the meads...' (T. Hardy)
- (81) Well, one *might as well* be hung for a sheep as for a lamb. (D. H. Lawrence)

## 5.3. Disposition (気質 [性質]) を表す WILL

- (82) Bad workmen *will* always blame their tools. (CELD)
- (83) Fruit *will* keep longer in the fridge. (CIDE=Cambridge International Dictionary of English)

跋語 紙面の都合で、従位文句 (Subordinate Clauses) 中の法助動詞や法副詞・法形容詞や法性上位文句 (Modal Superordinate Clauses) に就いては、本誌次号で扱う。

REFERENCES

(辞典も含めて citation の出典は省略)

- Coates, Jennifer. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries*. London: Croom Helm.
1995. "The Expression of Root and Epistemic Possibility in English." In Arts, Bas and Meyer, Charles F. (eds.) *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fox, Gwyneth *et al.* 1990. *Collins COBUILD English Grammar*. London: Collins.
- Leech, Geoffrey N. 1969. *Towards a Semantic Description of English*. London: Longman.
- Leech, Geoffrey and Svartvik, Jan. 1994. *A Communicative Grammar of English* 2nd Ed. London: Longman.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. 1971. *Grammar*. Harmondsworth: Penguin Books.
1974. *The English Verb*. London: Longman.
1979. *Modality and the English Modals*. London: Longman.
1986. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, Harold E. 1938. *A Grammar of English Words*. London: Longmans.
- Perkins, Michael R. 1983. *Modal Expressions in English*. Norwood: Ablex.
- Quirk, Randolph *et al.* 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- von Wright, E. H. 1951. *An Essay in Modal Logic*. Amsterdam: North Holland.

まえかわ てつを 英文学科  
(1995年10月25日受理)